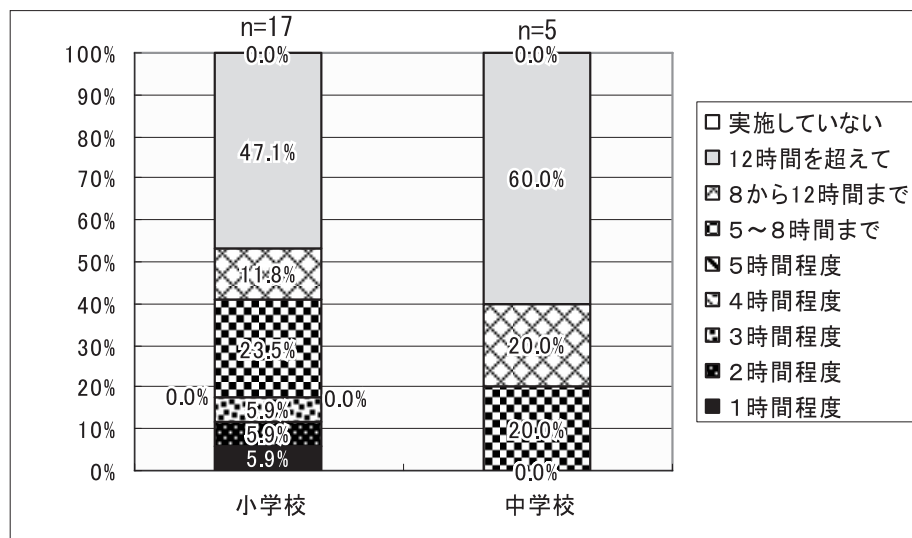


7. 言語障害特殊学級

(1) 交流及び共同学習の実施状況

①実施状況

図Ⅲ 7－1 に、言語障害特殊学級に在籍する児童生徒の交流及び共同学習の実施状況を示した。

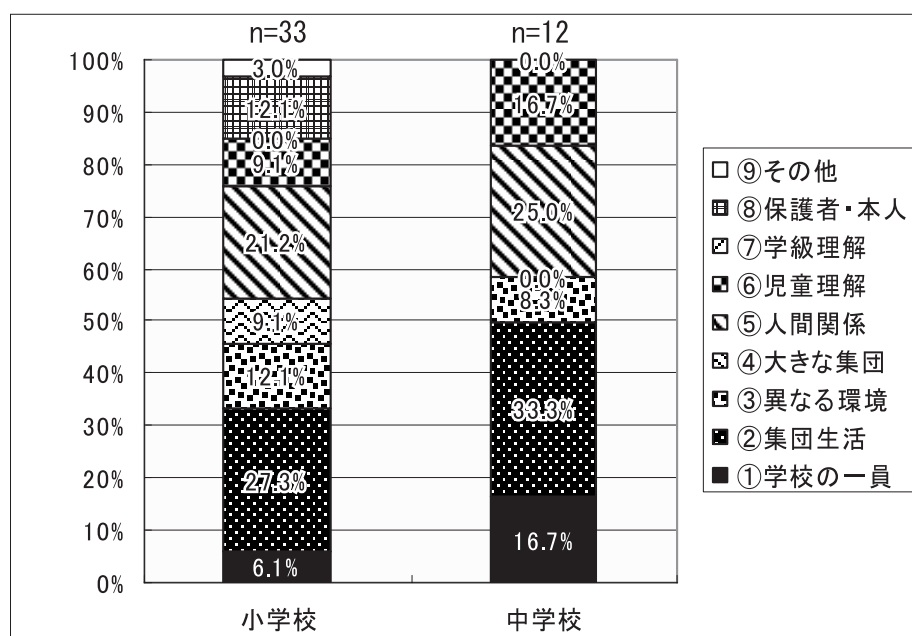


図Ⅲ 7－1 実施状況

このように、小・中学校ともに、調査対象の全ての児童生徒が交流を実施している。約半数の児童生徒は 12 時間以上の時間を交流している。また、小学校では、約 8 割の児童が 8 時間以上、中学校では、全ての生徒が 8 時間以上実施している。

②目的・ねらい

図Ⅲ 7－2 に、言語障害特殊学級における交流及び共同学習の目的・ねらいについて、その他を含む 10 項目の選択肢の中から、特に重要と思われるものを 3 つ回答してもらった。

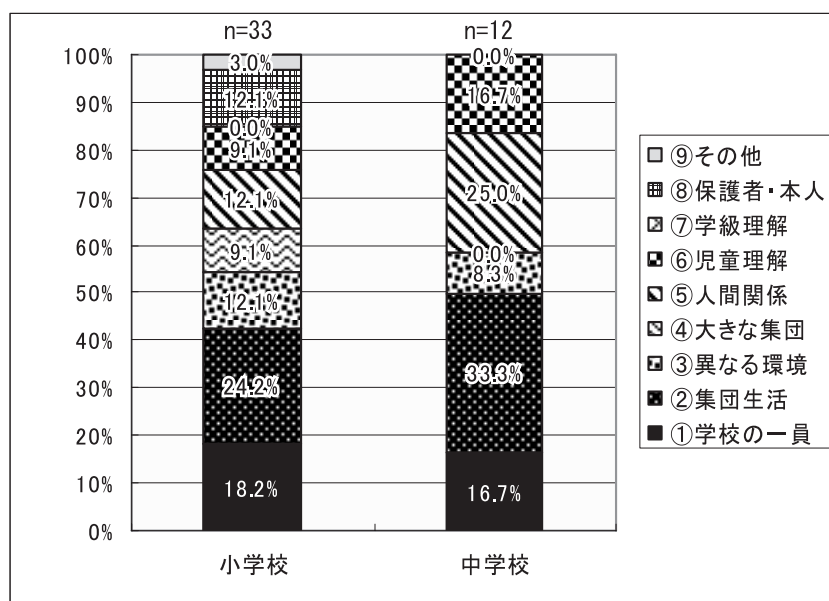


図Ⅲ 7－2 目的・ねらい

小・中学校ともに、集団生活の中で社会性を培うことの割合が高く、人間関係の形成が続く。特殊学級への理解を求める項目は、小・中学校ともに選択されていない。

③ 成 果

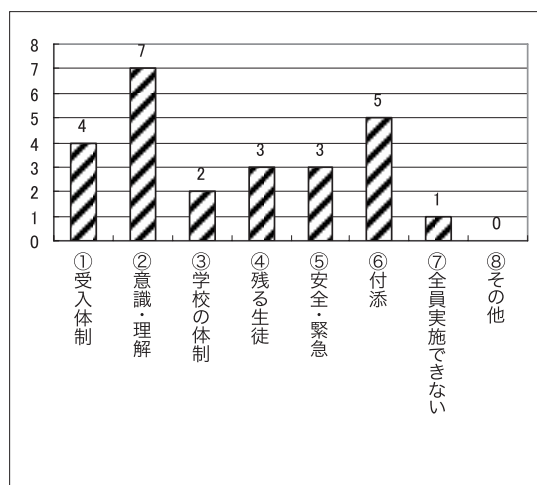
図Ⅲ 7－3 に言語障害特殊学級における交流及び共同学習の成果について示した。これは、その他を含む 10 項目の選択肢の中から、あてはまるものを 3 つ回答してもらったものをまとめたものである。



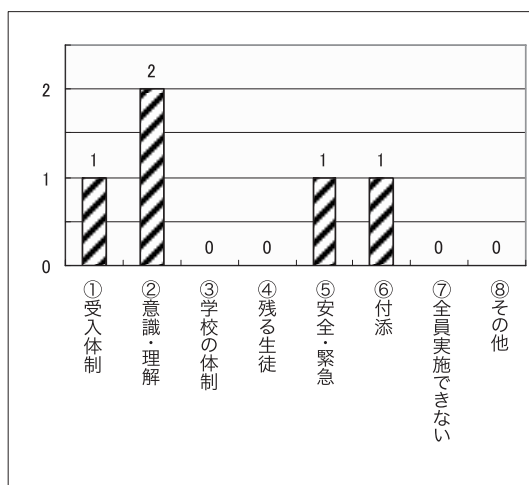
図Ⅲ 7－3 成果

目的・ねらいに対応した回答となっている。小・中学校ともに、集団生活の中で社会性を培うことの割合が高く、人間関係の形成が続く。特殊学級への理解を求める項目は、小・中学校ともに選択されていない。

④ 課 題



図Ⅲ 7－4 小学校の課題



図Ⅲ 7－5 中学校の課題

図Ⅲ 7－4 図Ⅲ 7－5 に、言語障害特殊学級における交流及び共同学習の課題について示した。これは、その他を含む 10 項目の選択肢の中から、あてはまるもの全てを回答してもらったものである。

小・中学校ともに、交流先での担任や児童生徒の意識や理解、受け入れ体制についての選択が高い。また、付き添いの課題も選択されている。

（２）Ａさんに対する配慮の実際

次の３つの条件にある児童生徒１人（以下Ａさんと記す）を選び、Ａさんに対する交流先での配慮の実際について記述してもらった結果をまとめた。３つの条件とは、通常の学級との交流で、教科学習の経験がある、在籍する児童生徒のうち、もっとも高学年である、障害種別や程度は問わない、であった。自由記述を整理し、特徴的な回答内容を以下に抜粋して列挙する。

①Ａさんに対する配慮

一斉指導の中で個別的な指示や声かけを行うなど個別に行う配慮

特別の教材の使用、視覚情報を補助的に活用するなど障害特性に応じた配慮などが挙げられていた。その他、特殊学級担任の付き添いなどが挙げられていた。

②環境・設備面での配慮

小学校では、FM補聴器の使用、中学校ではノートテイクが挙げられているが、聴覚障害のある児童生徒への対応と考えられる。また、座席位置の配慮、ロッカーの配慮などが障害特性に対応したと考えられる配慮が挙げられていた。

③集団参加への配慮

交流先の学級の児童にＡさんの障害や特性について説明し理解を得ること、担任にＡさんへの接し方について説明し配慮をお願いすることなどが挙げられていた。

その他校内教職員への説明、保護者との連携を挙げる回答もあった。

（松村 勘由）